

令和元年度 第1回外部評価委員会 議事録

1 日 時 令和元年5月20日(月) 午後2時から午後3時30分

2 場 所 県立農業大学校 会議室

3 出席者 [外部評価委員] 9名

三田井 研一 (宮崎県農業協同組合中央会 専務理事)
香川 憲一 (宮崎県農業法人経営者協会 会長)
黒木 覚市 (宮崎県立農業大学校同窓会 会長)
黒木 美佐子 (株式会社 黒木本店 取締役経理部長)
坂本 康子 (農業生産直売所のどかグループ代表 食育ティーチャー)
杉松 泰子 (料理研究家 調理師 食育ティーチャー)
松原 照美 (宮崎県地域営農組織協議会 集落営農法人部会 部会長)
横山 英二 (高鍋町役場農業政策課 課長)
戸高 朗 (宮崎県農業経営支援課農業担い手対策室 室長)

[事務局] 9名

山本 泰嗣 (校長)
菊池 修一 (副校長)
山下 勉 (副校長)
田中 俊彦 (農学科長)
松葉 久美 (農学科教授・フードビジネス専攻担当)
垂水 啓二郎 (畜産学科長)
平川 孝一 (教務学生課 准教授)
邊見 博子 (教務学生課 准教授)
垣内 佳介 (教務学生課 技師) ※記録担当

4 会次第

- (1) 開会
- (2) 外部評価委員並びに学校職員自己紹介
- (3) 学校長あいさつ
- (4) 説明
 - ①外部評価委員会について
 - ②学校概要について
 - ③教育計画について
 - ④昨年度の評価結果及び意見について
- (5) 協議
 - ①本年度の学校経営方針等の説明
 - ②学校評価表(案)評価項目の説明
 - ③意見交換
- (6) 今年度の予定
- (7) 学校長あいさつ
- (8) 閉会
- (9) 諸連絡

5 意見交換における発言

[委員]

今年度の入学者数は定員よりも10名少なく、相当減っていることについては、いろいろと原因があると思う。本校は高鍋農業高校との連携を重要視しているが、現在、どのような連携をしているのか。

[校長]

カリキュラムに高大連携を位置付けて、高鍋農業高校の生徒と合同で視察研修をしたり、共同のプロジェクト研究に取り組む等、一体的な教育を展開している。高鍋農業高校とはがっちりと連携が組んでいるが、その他の農業高校と組めていないところは課題だと思う。

本年度の入学者が定員を10名割った原因は、今年3月のこの会でも説明をしているが、これまでの入試の競争倍率が1.4倍とか1.5倍等高倍率になったことや、5名受験した学校が4名不合格になったりする等、「農大校はどうも通りにくい」という情報が浸透してしまった結果とも言われている。しかし、波はあると思うが来年度の入学希望者は70名程度がエントリーしたいと言っているようであるので、高鍋農業高校を中心にいろんな高校とも連携を取りながら学生の確保についてしっかり取り組みたい。

[委員]

確かに競争倍率が高いということで敬遠されたという面はあると思うが、オープンキャンパスに参加することで「ここは良い学校だ」と思う高校生もいるわけなので、農大校ももっと頑張してほしい。

[校長]

「農業大学校へ行きたい」という高校生が増えればこういうことにはならないと思うので、ご指摘の通りである。

[委員]

参考資料1ページの学生募集の項目に、昨年度の委員の主な意見として「複数の手法で取り組んでほしい」ということが書かれている。本校では、今年、学生募集に向けてどのような取組をするのか。

[校長]

私と副校長でまず高校を訪問し、続いて他の職員も“ローラー”で高校を訪問し、しっかりと説明をしていく。また、オープンキャンパスを実施する。

[委員]

以前、定員割れが続いていたことがある。それが普通科からも入学するようになる等、受験者が増えた要因は何か。

[校長]

善し悪しはあると思うが、一つは専修学校にして四年制大学へ進学ができるカリキュラムにしたことが挙げられる。もう一つはフードビジネスという形で職業につながる専攻ができたことである。以前もグリーンライフ等の言葉を使って食品加工はできていたが、高鍋農業高校と連携するような専攻ができたことが応募者数が増えた要因である。

また、完全入寮であったが、現在は通学も許可している。これが良い情報として高校生に流れていくともっと応募者が伸びる要因になると考えられるが、一方で管理する側からすると厳しいものがある。学生の管理というものも天秤にかけながら進めていく。

[委員]

農業大学校は一つの分野の大学校ということで、閉ざされた学校のイメージがある。開かれた学校というイメージを広げるための取組が必要だと思う。

違う項目になるが、昨年度「畜産試験場、農業試験場、他の大学、JAと連携した取組が大事である」という意見があった。こうした取組によって、開かれた学校となり、一般の方が農業大学校を見る機会となったり、学生と接する機会になったりするのではないか。また、学校教育の場をつくるとともに、学生募集にもつながっていくと考えるので、連携についてどのような計画があるのか教えて欲しい。

[教育担当副校長]

先ほど、学生募集について複数の取組が必要とのご意見があったが、国の「新規就農意欲喚起・相談等支援事業」というものがあり、昨年度から対象とする高校を県内の農業系高校8校に広げた。その前の年までは、高農との連携としていた。

昨年参加した高校生は2年生が多く、農大生と一緒に研修に行く取組について宮崎日日新聞でも紹介されたところであるが、この事業に参加した高校生の多くは「農大校へ進学したい」と回答している。本年度も実施するので、今後志願者の増加が期待できる。

私は農大校に昨年赴任したが、農大校は視察が多いという感想を持った。入学者の確保のことだけ考えれば高校生とだけやればいいのかなどという気がしていたが、中学校PTAの家庭教育学級であるとか、来月は高原町教育委員会の社会教育学級の高齢者の方が来られる。そういう方々の視察を受け入れれば、高齢者の方であればお孫さんへ「農大校へ行かないか」とか、PTAであれば子どもさんに「農大校良かったよ」というPRをしていただけたらと思う。職員には無理を言って案内をしてもらっているが、そういう取組をしていけばいいかなと思う。

[委員]

宮崎産業経営大学、南九州大学、宮崎大学と連携できる部分もあると思う。そうするとさらに広がりができると思う。

[委員]

連携について申し上げにくいことであるが、農業法人経営者協会事務局から、ぜひとも言ってほしいと頼まれたので代弁する。

法人協会と農大校は昨年からは連携を始めて、農業法人巡りというバスツアーをしている。私は仕事で行けなかったが、その時4法人を回り、帰る時に学生からアンケートをとって、法人さんにアンケートの答えを返そうとした。しかし、学生はアンケートにほとんど答えてくれなかった。一番驚いたのは、最後の自由コメント欄へのコメント記入がゼロだったこと。その話を聞いてショックだった。

評価シートの教育の質の向上のところに、「授業に対する取組が悪い学生が見受けられた」という昨年度の反省があるが、コメントゼロでは私たち農業法人は案内してくれた法人さんにアンケート結果を返すことができず、お詫びだけ言って終わった。

法人協会も気をつけますが、先生方もチェックする等気をつけていただきたいと思います。

[委員]

農業法人経営者協会と地域営農協議会は農大校と連携協定を締結している。学生の就職先でもあるし、農大校のPR先でもあるので、連携はきっちりやってもらわないと、今、会長が言われたとおり取組の成果は上がらない。

[委員]

『味覚の授業』をボランティアで毎年やっているが、先生がちゃんと感想文を書かせている学校とそうでない学校とがある。やはり、私たちも人なので、感想文を書いてくれるところに来年も行きたいと思う。

フェイスブックの投稿数が少ないのも問題だが、楽しさが学生さんや高校生とかに伝わることの方が大事である。何年前か前に同じ事を言ったが、講演が終わった後、私の料理を見ていらっしゃる方が多いが、私の料理教室に楽しそうなので行きたいとか言われる。楽しそうだからそこへ行きたいというようになる。今はネット社会なので、楽しいと思えることをたくさん発信していただきたい。松葉先生はいろんなところで販売されている。学生は礼儀正しいし、一生懸命やっているの、皆さんにお知らせしないともったいない。

[委員]

都城に限ってということではないと思うが、農大校への入学生を見ると畜産の個人経営への就職が多いと思う。農大校には、都城農業高校・農業科からの入学生があまりいないが、集落営農という組織からすると、今後の従業員の確保という問題があるので、農業科を卒業した学生がいてほしいと思う。

私のところでは、一昨年2名採用し、頑張ってもらっているが、今年はいろいろ事情があって、都城農業高校・畜産科を卒業した人を採用した。こちらとしては耕種の学科の卒業生に入ってきてほしかったが入れざるを得なかった。

農大校を卒業した学生の方が実践力があるというか、高卒の場合、大型特殊からの養成についても一からしていかなければならないので年数を要する。高校を訪問される時は農業科からも農大校へ進学するよう強く押してほしい。

[校長]

高校訪問の時は学校へ言っておくが、露地野菜・水稻系というの難しいと思う。

[委員]

昨年の評価はB又はAで概ね良かったが、BをBのまま終わらせるということではなくて、BをAにもっていくための試みをしてもらうことを是非お願いしたい。

[校長]

農業法人回りの仕組み方をもっと考えないといけない。それは学生がアンケートに書きたくなるような前振りなのか、研修の仕方なのか。団体で行ってしまうといけないのかなとも思う。

[委員]

われわれ法人協会と農大校との事前調整をしなかったのも悪かったと反省している。バスの中でアンケートを書かせたということであるが、バスの中では書かないと思う。せっかく時間を割いて案内してくださった法人の皆さまに、アンケートの結果はなかったと言わないといけないのは辛かった。

[校長]

法人の回り方も含めて検討したい。法人では、自主企画研修やインターンシップを受け入れてもらっているのだから、つながるようなことをしっかりとやりましょう。

魅力のある情報発信についてはこのメンバーを見ると SNS 対応の年代ではないので、どうしたものかと考えている。

[委員]

学生にさせたらどうか。畜産で言えば生まれたての牛さんはかわいいので「牛が生まれた～」とか。農業科学館あたりにいると、今日は親牛が鳴いているなあという日がある。セリに行ってお母さん牛が子どものことを思って鳴いているんだらうなあということで、「今日、セリに行きます」という内容で、ちょっとした愛情溢れたようなことを出すと人間味が違ってくるのかなと思う。

おとしは校長先生が一生懸命頑張っておられて、去年は松葉先生が頑張っておられたが、先生方は他の仕事があるから学生の方が感動があるのではないか。「花が咲きました」ということをあげると全然違って来る。「トルコキキョウが咲きました。トルコキキョウはうまいくくと2週間持ちますよ」とか、そう話題を掲載するとママンマルシェでトルコキキョウがもっと売れると思う。

[校長]

学生を巻き込んだ SNS の活用は、どうやってやるか仕組みも含めて考えたい。

[教授]

『アグリカレッジ・ひなた』については、学生はフェイスブックではなく、インスタグラムとツイッターを使っている。ひなたのインスタグラムはフードビジネス専攻の話題が多いが、自由に投稿させている。ほとんどの学生はインスタグラムはやっているが、フェイスブックはほぼやっていない。学生はツイッターかインスタグラムである。「フェイスブックはおばさんたちがやること」と言われる。

[委員]

両方やったらどうか。インスタグラムとフェイスブックは使っている対象が違う。

[委員]

自分はやらないが、私の会社では社員に「何でも投稿して良いよ」というとネガティブなことまで投稿されてしまうので、担当を決めている。また、投稿タイトルについては報告事項としている。

[校長]

楽しい投稿とするにはセンスも必要である。SNS の世代間ギャップもあるので考える。

[委員]

今、坂本委員が言われた日常の何気ないことを毎日投稿することが大事である。SNS の投稿数はとても多い。

[委員]

つぶやきということですね。

[委員]

私には、入学式、卒業式、農大祭の3つしか農大校との接点がない。もっと農大校に触れる機会を仕掛けていくということをしないと、一般の人には農大祭しか接点がない。

[校長]

今年から毎月の農大市を復活させた。今月は今週開催する。

[教授]

昨日、宮崎日日新聞社のイベントの欄に広告を1万9千円かけて学生たちが出した。

[委員]

農大市は軽トラ市が毎月第3土曜日に開催されるように、定期的に開催するのか。

[教授]

それに近い。授業の関係で第2木曜になったり第3木曜日になったりするが、基本的には第4木曜日開催ということにしている。

[委員]

そういう情報をわれわれに発信してもらえると、私の店やママンマルシェさんからも情報発信ができる。それがお互い相乗効果になり、うちにお客さんが来るし、その帰りに農大市に行って、その後ママンマルシェさんに寄っていくような一つのイベントにもなるので農大市を地域とつなげると面白くなる。

[委員]

日程を各JAの「農協だより」に掲載すればPRになる。お金は徴収しない。

(以上)